



# バリアガ・ 男たちの祭り

バリ島の小さな村に息づく聖なる儀式

年に一度、石垣に囲まれた静かな村に、  
にぎやかな日が出てくる。

この日、棘のあるパンダンの葉を束ねた「刀」と、  
アタの茎を編んで作った「盾」を持った男たちが、  
晴れ着をまとい、聖なる舞台上上がる。

まだ幼顔の少年、威勢の良い若い男、貫禄のある男……、  
身体と身体がぶつかり、緑の刀が振り下ろされ、  
瞬く間に男たちの身体に赤い血が滲んでいく。

着飾った美しい村の女たちが固唾を飲んで見守る。  
ひと目見ようとやってきた観光客たちが興奮に包まれる。  
島のなかで独自の伝統を守り続けてきた

バリアガの人たちの祈りが熱気の中に昇華されていく。



## バリの原住民バリアガ

14世紀中期、ジャワ島にマジャパヒト王国が旺盛を極めていたころ、ジャワ島から隣のバリ島へヒンドゥー教とともにジャワの文化が流入した。現在、バリ島に暮らす人々のほとんどは、その時代にジャワから海を渡ってやってきた人々で、今のバリ島には当時、伝わった文化が根づいている。

しかし、バリ島には、彼らとは異なる文化を守り続ける人々もいる。ジャワ人が多く移住する以前から、バリ島

に暮らしてきた原住民バリアガと呼ばれる民族だ。

デンパサール空港から、チャンディダサの美しいビーチラインを車で東に3時間ほど走ると、バリアガが暮らすトゥガナン村に到着する。海岸線から山間部へと続く道を5分ほど奥へ入ると村の入り口を示す看板が現れる。村は石塀に囲まれ、外から中の様子は見えない。なんとも神秘的な雰囲気だ。

トゥガナン村は現在、人口が約330人と小さい村だが、バリ島随一の観光地として知られ、世界中から多くの人々が訪れる。しかし、村の人々は、



【上】ネスティティの儀式を待つ村の若い娘たち 【右上】ロンタル(椰子)の葉で作られた紙に絵を描く職人。村の工芸品のひとつ 【右下】村内の各所に神を祭る祠があり、村の聖域として守られている。村にはさまざまな決まりごとがあり、各聖域に入ることが許される者が決まっている 【左上】村の聖なる場所に建てた建物で何百年も前から祭礼が行われてきた 【左下】村の入り口では、村で作られた伝統工芸品が売られる

昔から受け継がれてきた民族独自の慣習を守り続けており、村には今もなお、バリアガの血を保つため、結婚相手を村の中で選び、村以外の相手と結婚した者は、二度と村へ戻ることができなくなるという厳しい掟がある。

バリアガの集落は、バリ島北東のパトゥール山にあるキンタマーニ湖周辺などにもあるが、トゥガナン村のように村をあげてバリアガの血を守ろうとする村はほとんどない。

彼らは、ジャワ島から渡ってきたヒンドゥー教とは異なる。シヴァ神などバリ・ヒンドゥーの最高神を崇拝する

バリ島の他の地域と違い、この村で崇拜されているのはインドラ神だ。細かいカーストが存在し、現在、村にいる一人の高僧が村のすべての儀式を取り仕切っている。

## 守り続ける聖なる暦

純粋な血縁のほかに、トゥガナン村の人々がかたくなに守り続けているのが、村の伝統儀式を行う上で欠かせない独自の暦だ。

バリ島の暦は、ヒンドゥー教のサカ暦(太陰暦)と、1年を210日とす



【右頁】ネスティティの聖人役をする少年。聖人役をする少女がない場合、少年に少女の衣裳を着せて儀式を行う 【左頁】木製観覧車のアニナンは代々受け継がれ、修復を繰り返しながら大切にされている。祭り期間中の数日間は観光客も乗ることができる。祭りの後は大切に村の倉庫に保管される

るジャワ・バリ暦のウク暦に従う。寺院の周年祭などの伝統的な祭礼儀式、誕生日、結婚式、葬式などの日取りをこれらの暦で決めている。

しかしトウガナンの暦は、3年の周期で、1年目は12月360日、2年目は12月352日、3年目は13月283日で計算される。この暦に従って村独自の祭礼が行われており、バリ島のほとんどのヒンドゥー教徒が祝うサカ歴の新年ニユピ（静寂の日）や、その前夜祭のオゴオゴも、この村にはない。トウガナン村で新年を迎える月は「ウサバカサ」と呼ばれ、「アブアン」という新年の儀式が行われる。その5か月後の月は「ウサバクリマ」と呼び、「サシツ・サンバツ」という村で最も盛大な祭りが開かれる。

このサシツ・サンバツの祭りの日までの約1か月間は、毎日のように祭礼や奉納の儀式が行われ、村は一年で一番忙しくなる。その儀式のなかで、サシツ・サンバツのメインイベントが「プランパンダン」という儀式。これは、ヒンドゥー教で神の王とも呼ばれる、天候と戦の神・インドラ神へ感謝と祈りを捧げるもので、男たちが一対一で闘う「男たちの祭り」ともいえる

勇壮な儀式だ。

### 娘たちが宙を舞う前夜祭

プランパンダンが行われる前日の夕刻から日没まで、女たちで「ネスティティ」という儀式が行なわれる。この儀式の主人公は、結婚前の若い娘たちと、初潮前の一人の少女だ。

少女と若い娘たちは、正装であるグリーンシン（木綿の経緯<sup>たてこがすり</sup>）を身に纏い、頭には金でできたブンカマスという美しい花飾りをつける。グリーンシンは、グリーン（病氣）、シン（無し）という意味で、無病息災を願う魔除けの織物だ。トウガナン村の伝統手工芸品として知られている。各家庭で代々、大事に受け継がれる家宝で、なかには何代も受け継がれ、日本円で百万円近くする高価なものもあるという。

村人の中から、6歳以上で初潮前の少女が聖人役として選ばれることになっているが、条件に合う少女がいなければ、少年が代役する。聖人役の少女（少年）の家に、グリーンシンをまとった若い娘たちが集まり、バリアガの言葉で祈りを捧げるところから儀式は始

まる。この儀式は村人さえも覗いてはいけない聖なるものだという。

村の集会所には、この儀式に欠かせないアニナンという木製観覧車が設置され、食べ物や売物も出て、観光客から見物人でぎわい始める。そして、祈りを終えた娘たちが到着し、観衆が見守るなか、アニナンに取り付けられたプランコに乗り込んでいく。

娘たちが全員乗ると、村の青年が腕力で観覧車を動かし始める。すると、すぐに観覧車はかなり速いスピードで回り出し、プランコが一回転するかと思うほど大きく揺れる。インドラ神に祈りを捧げる儀式だが、大きく揺れる観覧車の動きに人生には浮き沈みがある教訓を込めているという。

将来、これに乗ることになるであろう、村の少女がその様子を見つめていた。「あなたも乗ってみたい？」と聞くと、「落ちるかもしれないから怖い」と笑った。しつかりとプランコを握らないと落ちる可能性はある。聞けば、かつて落ちてしまった少女もいるらしい。しかし、揺れるアニナンの上の娘たちは平然とした表情だった。恐怖心も忘れさせるほど祈りに集中しているからだろうか。



未婚の女たちは特別の観戦台で見守る。既婚の女たちは村内の寺院を周り、祈りを捧げる

未婚の女たちは特別の観戦台で見守る。既婚の女たちは村内の寺院を周り、祈りを捧げる

未婚の女たちは特別の観戦台で見守る。既婚の女たちは村内の寺院を周り、祈りを捧げる



トゥガナン村への行き方

デンパサール空港から車で約2時間。イダバグース・マントラバイパスを直進し、カランガッセム県チャンティダサの街から車で約5分。村へ入るにはお布施が必要 (Rp.20,000 が目安)。トゥガナン村の暦によると、今年は360日間ある年で、新暦の7月14日、15日にこの「プランパンダン (ムカレカレ)」が行われる。

プランパンダンに参加する者は、年齢に関係なく、儀式の前にトゥアックという椰子酒を飲む。2日間間わり、「闘い」のレベルに応じ、2回に分けて行われる。初日は比較的レベルが低く、村の少年や男性観光客 (村人と同じ正装をして聖域に入れる条件を満たした者) が参加できる。2日目は村人たちだけで儀式が執り行なわれる。

男たちの祭り・プランパンダン

翌日の正午近く、いよいよヤサシツ・サンパツのメインイベント、プランパンダンが始まる。バリアガの言葉では「ムカレカレ」という儀式だが、一般的にはインドネ



シア語で「プランパンダン」と呼ばれている。「プラン」とは「闘い」という意味で、「パンダン」とはバリ島に自生するタコノキ科の植物だ。この棘のある葉の部分束ねて「刀」にしたものと、シダ科の植物アタの茎を裂いて乾燥させたものを細かく編み込んだ「盾」を持った二人の男が村の聖域に置かれた舞台の上で叩き合う。

状態になる者もいる。痛くないのだろうか？ 若者に尋ねると、「もちろん痛いけど、小さいころから慣れている」という。痛みは名誉と威厳につながる。血が多く流れるほど神への深い献身とみなされ、村人たちは満足するのだ。

この儀式に出る男たちも、この村の伝統的な正装をする。上半身は裸、下半身にパティックやグリンシンなどの布を巻き、頭には他のバリの民族の正装と同じウダンという布製の帽子を冠る。一見すると、格闘試合に思えるが、この儀式には勝ち負けという考え方は一切ない。競技でも、マールシャルアーツでもない。これは血を流すことで神への奉納とする儀式なのである。

独自の慣習を守り続けてきたトゥガナン村だが、近代化が進むなかで、カーナストは徐々に形骸化し、村以外の人間との婚姻を禁じた厳しい掟も、40年ほど前に初めて破られてから徐々に崩れ始めた。今では村の外だけでなく、海外から村に嫁いだ女性もいるという。ただ、村が変わりつつあるなかでも、バリアガであることの誇りと、村独特の伝統の祭りは、ずっと受け継がれていくだろう。